Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞林道郎『死者とともに生きる ボードリヤール『象徴交換と死』を読み直す
Author(s)	宮前, 良平
Citation	災害と共生. 2018, 2(1), p. 37-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68241
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

林道郎『死者とともに生きる　ボードリヤール『象徴交換と死』を読み直す』現代書館，2015 年 8 月，230 頁

宮前良平[*1*2]
Ryohei MIYAMAE

１．共生というテーマ

共生とは何かを考えるとき、私はいつも困惑する。共生という語の持つイメージがあまりに漠然としているからだ。そのわりに「〇〇との共生」というテーマを設定した本は、驚くほど多く、しかしながら、共生という概念について明確な説明を与えているものは、ほとんど皆無である。言い換えれば、これらの本は、「共生とは何か」ではなく「〇〇とは何か」を論じているにすぎず、とどのつまり、共生は一種の枕詞となっているにすぎないのである。何らかの特定の意味合いを持っていないにもかかわらず、何か大切なことを主張しているように感じ取られがちであるという意味で、共生とはプラスチックワードであるとも言えるだろう。そして、プラスチックワードと化した共生は、それが何を指すのかについて、より一層不明瞭になっている。

共生がプラスチックワード化している現在、語られることが少なくなってしまったのは、理想的な共生状態とは、どのような状態であるかという点である。理想的に共生を実現するためには、ありとあらゆる当事者がそれぞれの差異を認めあう必要があるということは、読者も同意してくれるだろう。つまり、共生の理想状態とは、さしあたり、ありとあらゆる人が自分以外のものとの差異を認め合い尊重しあっている状態であると言ってしまってもよいだろう。

しかし、そもそも差異とは、いったいどのように整理することができるだろうか。本稿ではボードリヤールの思想をもとにそれを紐解いてみよう。評者だけでは心細いので、ボードリヤールの思想に詳しい林道郎氏の読解とともに、ボードリヤールの思想を注意深く取り出してみよう。

２．魚にとっての水――象徴交換の社会

本書評の目的は、共生の理想状態について差異という概念から考えることであるが、まずは、ボードリヤールが主張した、やや複雑な現代社会論をひもといてみよう。

ボードリヤールによる、消費社会の分析の軸となっているのは、現代消費社会における価値の体系の変化である。かつてマルクスは、商品に注入された労働価値と付加された剰余価値をベースにした価値論を提唱したが、ボードリヤールは、現代消費社会においてこのような価値論が有効性を失ってしまったと主張した。そのことをかれは「価値の交換法則から構造法則へと移行してしまった」（『象徴交換と死』p.32、以下『象徴交換と死』からの引用は ESM と記す）とか「コードの中への生産の解消」（ESM, p.46）と表現しているが、これはつまり、商品 A と商品 B の価値のちがいは、それらが生産されるときの労働の多寡によってではなく、それらが消費されるときに消費者に魅力を訴えかける表象、すなわち共時的なコードにおいてどれだけうまく機能するかによって規定されるということである。たとえば、広告によって共時的なコード（いわゆる、モード）が創り出され、それに沿った商品が価値を獲得していく。このとき、商品がどれだけの労働価値を持っているかについては、価値を考える上でほとんど考慮されない。このように、商品間の差異にもとづく価値をコードによって消費するあり方をボードリヤールは、記号消費と呼んだ。

記号消費は、原初的な形態において、商品交換と密接に関わっていた。たとえば、貨幣は貨幣自体に価値があるからこそ交換されるのであった。しかし、記号消費が高度に洗練されると、貨幣によって貨幣を消費し、そのことによって価値の差異を作り出すという構造が生じる。こうなると、貨幣の価値は、貨幣自体に内在しているのではなく、いかに交換されているかという構造によって決定されることとなる。このように、記号消費は、現代社会において、差異が差異を自律的に生みだすような消費のあり方へと転換していったのであった。

差異が差異を生み出すという構造は、ボードリヤールによってシミュラークルという言葉で定式化された。シミュラークルとは、「元来、実在に対する影、あるいは模造、偽造を意味する言葉であるが、ボードリヤールはそれを敷衍し、現実の事物を記号的に反復し、それに取って代わる（乗っ取る）現象一般を指す概念として使用している」（本書, p.46）。

そして、かれは、シミュラークルの歴史的発展を「模造」「生産」「シミュレーション」と区分した。「模造」とは、バロック期の漆喰の使用に代表される、コピーされた記号の流通であり、「生産」とは、コピーの大量生産によるオリジナルなきコピーの登場を意味する。例えば、コカ・コーラは、全世界的に同じ形同じ味で流通しているが、そのオリジナルはもはや存在しない。なぜなら、オリジナルの模造によるコピーの複製という図式ではなく、コピーからコピーが生産されるという図式が確立されたからである。コピーによる差異の消失と言い換えることもできよう。

しかし、現代社会は、このような状況下においてもなお、差異を見いだすことに成功したとボードリヤールは主張した。大量生産によって同一性を反復しながら、緻密な情報流通システムによってわずかな売上（消費）の差異を見逃さなくなる。商品が消費されることで、在庫を補充させるために商品が生産される。より多く売れる消費は、より多く売れるという差異によって、生産活動を刺激し続ける。この消費→生産→さらなる消費という循環によって、その商品は価値を増大させ続ける。このように発展したシミュラークルは、構造によって差異化された意味から価値を見いだし、交換の原動力にしている。そこにもはや実体はない。ボードリヤールは、この実体の不在を強調して、この交換システムを象徴交換と表現した。

この社会システムは、その中で生活しているわれわれからすれば、意識されることのないほどあまりに自明なシステムである。それゆえ、現代におけるシミュラークルが深く浸透したわれわれの身体は、それが浸透していった過程をもはや思い出すことができない。かつて、シミュラークルが浸透する前にあったはずのわれわれの「身体」なるものの存在を、われわれはもはや想像できなくなっているのである。それはまるで、「魚にとっての水のようなものであり、その外部で生きることが不可能なほど、存在全体を条件づける『世界』として私たちの身体そして脳と一体化したものになっているということである」（本書, p.121）。換言すれば、現代社会を生きる私たちは、消費活動を行うことによって、構造による差異の生産からもはや逃れることはできないのである。

ここで、共生社会の話に一旦戻ろう。本稿の冒頭で評者は、「共生の理想状態とは、さしあたり、ありとあらゆる人が自分以外のものとの差異を認め合い尊重しあっている状態である」と定義した。この定義は、ボードリヤールによる差異概念の理解を踏まえると以下のような態度となる。現代社会に住むわれわれは、差異を所与のものとしてアプリオリに享受し生産している。であるからして、その差異をネガティブに使用することは倫理的に違反している。言い換えれば、「差異ありき」という規範を倫理的に処理することによって「差異差別反対」という道徳規範が成り立つのである。

しかしながら、「差異ありき」という規範は、後期ボードリヤールにとってそれほど当然のものでは無くなっていった。魚にとっての水という比喩には、もうひとつの含意がある。それは、水の外には、外部世界があるという点である。シミュラークルが染みついた社会は、内部者からはそれ自体で存在しているように感じられているが、その存在前提として外部が必要となっているのである。そして、シミュラークルは、その外部を、内部に取り込みながら浸透していく。しかしながら、シミュラークルが到達しえないような外部をボードリヤールは、見定めていた。それこそが、死、であった。

ボードリヤールは、死がわれわれの社会において受け入れられなくなっていることを以下のように述べた。「これらの都市では、物理的空間の面でも心理的空間の面でも、死者たちのためにとっておかれる余地はなくなった。（中略）本当のところは人びとは死をどう扱っていいのかわからなくなっているのだ。なぜなら今日では死者であることは正常ではないからである。（中略）死者たちに与えられるべき場所も空間――時間もないのだから、死者のすみかが見いだされるわけもなく、だからかれらは根源的なユートピアへと追放される――以前にもまして囲い込まれ、そして蒸発させられる」（ESM, p.305, 強調本文）。象徴交換によるシミュラークルが浸透してしまったわれわれは、死者を、「死という商品」の消費というかたちで社会システムに取り込むようになってしまった。葬式も墓石も戒名も、高額を支払うことで、その対価として、金額に見合ったものが与えられる。しかし、本来、死は、差異を無化する存在であり、であるからこそ、差異ありきという規範が浸透しきった「今日では死者であることは正常ではない」のである。このように、手懐けたはずの死が、われわれの社会に不用意に入ってくると、差異にまみれた社会は崩壊する――まるで、現代社会の象徴であったワールドトレードセンタービルがテロリストによって崩壊したように――とボードリヤールは、警告したのである。

３．死者の存在論へ

しかし、本書では、ボードリヤールの警句――差異無き死者を現代社会から遠ざけよ――をあえて裏切るかたちで、死者との共生について論が進められていく。なぜならば、林が言うには、3.11 を経験した日本社会において、死は、もはや外部ではないからである。ならばわれわれは、内部におかれた死、死者といかに関係を取り結ぶことができるだろうか。そしてそれは、死者を象徴交換による差異生産の構造に堕する形で行われてはならないはずである。

そもそも、ボードリヤールは、西洋社会の歴史を俯瞰した上で、死を権力とのつながりという側面から分析していた。たとえば、教会は、死についての意味付けを一手に引き受けることによって権力を握り、近代国家は、同様に、死者を英雄とみなし聖別する権利を独占することによって権力をアピールした。「共同体＝権力にとって、構成員の死をどのように利用するかは、自らの強化にとって決定的に重要な意味を持っていたのであり、死者に『意味』を付与する権限の独占を通じて、体制の存続と強化を図ってきたとボードリヤールは主張」（本書, p.183）した。

このような死者に対して積極的に意味を付与していくことが権力と結びついていたのは、繰り返すが、われわれが象徴交換の世界に生きているからである。「生」は、「生きることの意味」と象徴交換され、「死」は「死んだことの意味」と象徴交換されることでのみ存在する。

本書では、このような象徴交換による死の体系を対象化するために、死を 2 種類に分けている。1 つは、記念碑的な死であり、つまり、上述のような意味付けによる死である。もう 1 つは、写真的な死である。写真とは、ロラン・バルトを引くまでもなく、物語られる以前の存在を端的に描写している。いわば写真は、シニフィエを剥ぎ取られたシニフィアンとして存在している。そこに意味や物語を付け足すのは、意味の病に取り憑かれた人間のほうである。たとえば、「ハゲタカと少女」に、紛争地帯での子どもの貧困という社会的な問題を教養的知性から付与するのは、写真を見た人間であり、あの写真には、ただ、あまりに痩せこけた黒人の少女とその奥からこちらを見据えるハゲタカが写っているだけである。ハゲタカが少女の死を待っているというのも、写真が内在している物語ではなく、外部の観客による解釈にすぎない。写真は語らず、ただわれわれに語らせようと迫ってくる（ようにわれわれが感じ取っている）のみである。つまり、写真的な死とは、死を「意味を剥ぎ取られた現存性」（本書, p.191）として認めようというわれわれの姿勢を表している(1)。

記念碑的な死を死者の意味論と言い換えるなら、死にまつわる意味を剥ぎ取った写真的な死は、非意味論、または、死者の存在論と言い換えることができよう。残念ながら、本書では、死の存在論についてこれ以上の深い考察はなされていない。しかし、評者は、死の存在論的な姿勢に、共生という側面から非常に大きな可能性を感じている。それは、死者と生者を同様に扱うことの萌芽が見えるからである。冷静に考えてみれば、われわれは、生きている者になんらかの意味がアプリオリに内在しているとは考えない。たとえば、障害を持って生まれた子どもにたいして、「この子は前世で罪を犯してきたから罰が当たった」というような意味付けは、家族がその理不尽な運命を強引に得心するためにおこなうことはあるだろうが、第三者の目からすれば、それが真実であるとは思わない。しかしながら、死者に対しては、不思議なほど不用意に意味付けをおこなってしまうし、それを受け入れてしまう。そのため、なぜ死んでしまったのかについての物語が雄弁に語られるあまり、その物語以前の死者の存在についてかえりみられることは少ない。知覧の特攻隊員たちは、「国家に運命を背負わされた第二次世界大戦末期の特攻隊員」としてでしか、かれらの人生を物語られない。しかし、当然のことながら、すべての物語が剥ぎ取られてもなお残る歴史が、かれらにもある。それを今一度、われわれは、「物語」に回収することなく受け入れる必要があるのではないだろうか(2)。

ふたたび、冒頭の議論に戻ろう。「差異を認め合おう」という倫理規範は、現代社会が「差異ありき」の象徴交換による消費システムによって駆動していることが基盤にあった。しかしながら、本書のタイトルでもある「死者とともに生きる」という命題を、差異という視点から捉えなおしてみると「差異から逃れよ」という規範を基盤に、共生社会論を捉え返す必要が生じる。つまり、そもそも差異が存在するのだから、差異を認め合おうという主張ではなく、そもそも差異化することなしに共生を捉えてみようという主張もまた議論されるに値するものとなるだろう。

その全体像を描くことは、まだできないが、共生の理想状態とは、共生という意味付けをすべて剥ぎ取った後にそれでもなお残りつづけるものなのでは

ないだろうかとさしあたり結論めいたことは言える。生者のシステムとして象徴交換を主張したボードリヤールが、同一の本の中で死について扱った理由は、象徴交換という高度に発展した意味のシステムの果てにあるものが死であったからではないだろうか。だからわれわれは、注意深く、死者に付与された物語を剥ぎ取らなければならない。意味による差異の反復の時代は、終わりを告げたのだから。

補注

(1) 記念碑的な死を言語的＝意味以後の概念として、また、写真的な死を非言語的＝意味以前の概念として画一的に対照することには、一層の注意が必要である。そもそも何らかの現象がわれわれに現前するとき、所与としてではなく、「意味あるもの」として現れる。もちろん意味あるものとしてわれわれに現前させるものは言語には限らない。そのため、写真であるから、そこには意味が含まれていないという想定は、必ずしも正確ではなく、写真であっても、意味あるものとしてわれわれに現前していると考えてしかるべきだろう。しかしながら、本書評は著者である林道郎氏の読解に準じて議論を展開しており、また、その主眼が「差異＝意味」から離れる可能性を模索していくことであるため、あえて意味と写真を理解容易な二項対立として対照した。

(2) 本文や前注で「言葉」を「意味」を代表するものとして、「写真」を「意味以前的なもの」を代表するものとして論述してきたが、この対照はさらに、「意味に開かれているもの」と「意味を固定化するもの」の対立としても理解できる。しかし、これもまた現時点では正確な論考とは言いがたい。というのも、写真にも、意味を固定化する働きはあるだろうし、言葉にも意味をオープンにする働きがある。たとえば、昨今流行りのオープンダイアローグなどは、対話の中で、自らの現象に言葉として意味づけることを通じて、その意味づけを問い直していく＝開いていくという試みであると言えよう。まとめれば、言葉のみが意味を固定化するものでもないし、写真のみが意味を開いていくものでもない。しかしながら、本書評においては、死者に対する意味の固定化が強まりつつあるのではないだろうかという本書の問題意識に則して、やや単純ではあるが、上記の対立軸を援用した。

参考文献

Baudrilard, J. (1976). *L'échange symbolique et la mort.* Paris: Gallimard.
（ボードリヤール, J. 今村仁司・塚原文（訳）（1982）. 象徴交換と死 筑摩書房）